

自然回帰の時代のなかで固定種の普及につとめる

●野口種苗研究所・野口 勲

第33回・2008年受賞。固定種の維持・増殖・販売を通してそれぞれの風土に生命力に満ちた野菜生産の定着をすすめた

節目の年の受賞

山崎記念農業賞をいただいた2008年という年は、私にとって節目の年でした。

昭和4年に創業した祖父の代から80年営業してきた商店街の店を畳み、固定種だけをネットで販売することを決心した年であり、また、64歳にして初めての著書を出した年でもありました。

「山崎農業賞の候補に挙がったので、訪問して話を聞きたい」と、事務局の小泉浩郎さんからお電話をいただいた日は、出版社の社長さんが、再校のゲラを届けてくれた日でした。「山崎農業賞って、知ってます？」寡聞にしまったく存じ上げなかった私が問うと、さすが農業書の版元だけあって、すかさず創森社の相場社長が言いました。

「農業分野では有名な賞ですよ。ご著書に箔が付くから、もらえるといいですね」と。

やがて事務局長の小泉さんと幹事の石川さんが、埼玉県飯能市の町外れにある我が店にお見えになりました。

「野口種苗研究所という店名の由来は？」という質問に、「戦後父が発芽試験器を考案し、全国のタネ屋に普及したいと考えて、大手種苗会社に販売を依頼したところ、『野口種苗園なんてちっぽけなタネ屋の名前じゃ売れない。もっと箔のある名称に変えたほうがいい』と言われて付けた名前なんです。実は、固定種(在来種)に特化しただけの、た

だのタネ屋です」。

あまり要領を得ないままお二人の質問にお答えし、お帰りになってから、お茶一杯だけでよかったかしらなどと反省しているうちに、受賞のお知らせが届き、妻と友人との三人で授賞式に伺ったのでした。

「第33回山崎記念農業賞受賞」という金箔は、以後『いのちの種を未来に』(創森社、2008年)の著者プロフィールを皮切りに、雑誌への寄稿時や、新聞インタビューから講演会リーフレットまで必ず紹介されて、農学部出身でない、いわば素人同然のタネ屋の発言に、それとなく裏付けを与えてくれます。本当にありがとうございました。

変わりつつある人々の意識

商店街の店舗併用住宅を大家に返し、両親の住む田舎の自宅に入って、倉庫を改造した店でネット通販主体に営業を再開した当座は、それまで販売していた農業資材も、園芸用品も、農薬も、肥料も、はては野菜苗からF₁種子まで、ありとあらゆる商品を営業品目から外してしまったので、年間売上も1千万に届かず、従業員も発送担当のアルバイト1人だけで、この先どうなるのかわからない心細い船出でした。

「どこでも売っているF₁(一代雑種)のタネでなく、自家採種できる、昔のままの固定種・在来種だけを販売しているタネ屋です」と言っても、「F₁て何ですか」と聞き返されること

が多かった6年前に比べ、「固定種を売っているようですが、オンラインショップの中の、どれが固定種なんですか」という電話がかかるようにまでなりました。

「どれがって、うちは固定種の専門店です。オンラインショップに出ている五百品目は、すべて固定種です」とお答えしています。おかげさまで売上げも6年間で6倍に伸び、従業員も4人に増えました。固定種という言葉が普及してきた結果、最近、新宿伊勢丹の生鮮食品売場に、固定種野菜コーナーまで登場しているそうです。

F₁は、いいタネだ。と、50年以上刷り込まれてきた人々の意識が、いま少しずつ変わってきています。2冊目の著者『タネが危ない』（日経新聞出版社、2011年）や、全国各地での講演を通じて、F₁品種がどのようにして作られているのかを知って衝撃を受けた人々が、自然のままのタネに回帰しはじめています。大量生産・大量消費・経済効率・グローバリズムというこれまでの日本社会のお題目に、人々が疑念を抱きはじめていくといってもいいでしょう。自然回帰という大波が、いま日本人の心を洗濯しているのかもしれない。

地道な活動が世界を変える時代に

真実を何も知らされないまま、安全神話に目隠しされてきた人々が、3・11以後、原発事故によって目覚めつつあります。そして今日の社会変化の底流には、政治家やマスメディアへの不信感があると私は感じています。

組織人としては経済成長を目指しつつ、生活者としては「経済より人」、「金より命」というアンビバレントな意識が、人生のテーマとして浮上ってきている時代なのでしょう。

こうした国民意識の変化に最も鈍感なのが、政治家や官僚、マスコミという支配層で

あり、彼等の意向にお墨付を与える学者などの権威筋です。しかし、人々の心の内奥に潜む不安や疑問に目を瞑り、十年一日の学説やスローガンを叫ぶばかりでは、人々の心を未来に向かって開くことはできません。

最近、『致知』という雑誌(2014年7月号)で、安倍総理夫人と対談しました。その際、安倍昭恵さんが晩餐会で聞いたイスラエル首相の言葉を引用され、「自分が一番影響を受けるのは妻の言葉だとおっしゃっていました。なぜなら妻は政治でものを考えないからだ」と。それに引き換えわが亭主殿は、という無念の思いも感じられましたが(笑)。

「私は、カリスマがいてみんながそれについていくような時代はもう終わったと思うんです。世界を変えるぞと拳を振り上げるのではなくて、野口さんのように各々の持ち場で、世の中のために地道に活動されている方がたくさんいらっしゃいます」ともおっしゃっていただきました。ありがたいことです。

「アカデミズムやジャーナリズムの世界で大きく取り上げられなくても、農業・農村や環境分野に有意義な活動を行っている個人や団体を評価する」という山崎記念農業賞をいただいたことは、いまもずっと心の励みとなっています。



表彰式後、記念講演「命をつなぎ発展していく固定種を普及していきたい」を行なう野口氏(2008年)